

1245
7

開卷驚奇俠客傳第二集卷之二

東都 曲亭主人編次



第十二回 義烈と感とく 俠民身首と斂む
靈夢を説く 同人墓表を建つ

復説巡礼 廢寺多。初て実父と認めぬ。その孝順の切なる由。耳无山も鎮く。山
梅花も物い久況や五常と具足。世の萬物の霊とらる。人木石もあまされ。子もあ
廢吉と左見右見て。原来孺子の音。回子産せし。這身は胤であのけよ。親とらん。面
伏る。這年来の俺う。の豫後もゆるらん。和郎が養父の武士。たゞ。六松以来。母共
侶の過困。やの什麼る。所以を浮世の餘波。不聞き。細る霜相枯の虫。形もく
露寒。冷涙も。哽ぶ。廢吉の。やう。ふ目と。推拭して。俺身の。養父の。楫取老母。介朝の

俠客傳第二集卷二

羣玉堂印發

と吸れる微禄を新田譜第賜屋少将は供まると。船由殿の親兵を最初新
田の城に在りし時生育より一をうへ前妻身まかりたれば母の俺身と推して那
後妻の身のみと年歴之後まづ知り免侍而参り程の如く右少将の俱とせんと
陸奥の國府二年と累の義隆奥と落めても。言免伴のまゝにて武藏相模の
わりの比まで俺身の母れと共侶の野上野に送され。侍而九年前の夏義隆殿
れぬ。比々々々朋輩の親兵幾名と共共侶の厚木。御旅亭に留置れて。信底
倉へおておられ。絶の近臣五名との後。御運の微る。這里まで亡させぬ
よの。厚木木に居る。か威散々。落亡たる。中不俺多々の。世は從人の欲せぬ。
俺の微職の武夫。是も。世當家仕する。君恩尤波々。然らば本処留置れて
末期の免伴。送感の。今。是非及び。切て胸腹撞破して五家臣
連。異なる。世の忠信の志。果せん。と。決り。事情と侍と。寫の送してその

夜女音。伏せぬ。風の便。母の對。然る。俺身。才の夏。之
けれ。只の憂。明。暮。と。春。の。時。疫。流。れ。母。の。親
族。多。の。氏。族。大。の。難。を。過。す。當。年。母。の。宣。命。
俺。身。你。と。推。して。老。母。介。主。添。ひ。よ。才。一。稔。許。し。七。峯。上。隔。て。山。雞。の。一。所。樓。に
年。と。歴。て。俟。甲。斐。も。る。り。よ。有。般。系。馮。心。弟。兄。三。所。親。も。送。る。死。亡。の。愁。ま
活。残。り。の。過。世。の。業。報。竭。き。あ。り。後。の。世。ま。心。の。こ。ろ。這。里。を。饑。と。等。ん。よ。り。
亡。君。亡。父。の。菩。提。の。與。靈。山。靈。地。と。巡。礼。し。佛。の。冥。助。願。へ。如。右。の。如。く。告
示。され。逆。旅。の。准。備。の。杖。と。笠。の。外。東。西。を。親。と。子。が。馴。り。里。と。立。て。食。と
色。幾。百。里。坂。東。西。四。六。十。餘。个。所。の。觀。世。音。と。拜。と。な。り。不。諸。井。無。跡。の。靈。場。城
ち。巡。り。既。六。稔。及。び。今。茲。の。貌。姑。峯。の。赴。り。亡。君。と。吊。ひ。ま。る。厚。木。の。里。の
杖。と。更。て。亡。夫。の。墓。を。詣。ん。と。られ。ふ。よ。共。侶。の。ち。踰。來。る。這。山。路。也。と。ひ。け。る。母

大分傳第二冊卷三
二
厚木里

の病着既危く、あき折俺身を枕方召近着て、あき今を具告せり。が、あき俗い実の
 父多あり、その故の箇様々々、あきと成身の事告知され、親子の證據贈られ、あき迷子
 牌の事をもある、あき頭陀袋と撥拂の牌と、あき遞与ひ。親の歎死の後の事、あき
 只一人子一人多、あき旅宿の心細き、俺身も、あき誰とかも所縁、あき浮世を渡り、あきせえ切て
 廿餘年、あき牛馬の中踏む、あき十五六十年不足、あき冬冬、あき誕辰、あき小胆見、あき愛を、あき熟
 ても又い、あきどの、あき幼少、あき痛き、あき実の、あき父々の、あきと云く、あき身持、あきて家、あきを喪ひ、あき往
 方も、あき知ざる、あきの、あき程、あき歴、あきて、あき何、あきか、あき然、あきとも、あき鬼、あきなる、あき人の、あき心の、あきを、あきばや、あき名、あき告、あきも、あき遇、あき
あき親、あき子、あきを、あき断、あきも、あき絶、あきれ、あきぬ、あき血、あき絡、あきの、あき思、あき愛、あきよ、あきも、あき有、あき殺、あきの、あき事、あきあり、あき下、あき舊、あき里、あきを、あき假、あき名、あき川、あき人、あきと、あき向、あき
あき所在、あきの、あき知、あきれ、あきせ、あきん、あき尋、あきよ、あきか、あきとの、あき送、あきされ、あき母、あきの、あき道、あきを、あき料、あきと、あき環、あきの、あき會、あきさ、あき親、あき子、あきの
あき宿、あき因、あき短、あき宵、あきの、あき明、あきる、あき等、あき及、あき死、あき別、あきれ、あき轍、あきの、あき水、あきと、あき喪、あきひ、あき峯、あきの、あき株、あきの、あき樹、あき離、あきる、あき俺、あき歎、あき死、あき
あきあ、あきい、あきも、あき倍、あきさ、あき悲、あきな、あきる、あきと、あき声、あき立、あきて、あき腸、あきを、あき断、あき孝、あき子、あきの、あき哀、あき傷、あきな、あきる、あき堪、あきぬ、あき目、あき四、あき郎、あきも、あき涙、あき坐、あきす、あき

吐て、あき原来、あき和、あき郎、あきの、あき養、あき育、あき親、あきの、あき脇、あき屋、あき殿、あきの内、あき内、あき人、あき船、あき田、あき主、あきの、あき野、あき兵、あきを、あき一、あき旅、あき這、あき方、あきさ、あきる、あきを、あき右
あき心、あき符、あき家、あきに、あき金、あき運、あきせ、あきは、あきし、あきま、あきせ、あき則、あき和、あき郎、あきの、あき御、あき主、あき君、あき之、あき養、あき実、あき二、あき親、あきの、あき志、あきを、あき継、あきて、あき忠、あき義、あきを、あき盡、あき
あき去、あきね、あきが、あきさ、あきて、あきも、あきと、あきる、あきの、あき舌、あきも、あき剛、あきす、あき必、あき死、あきの、あき苦、あき三、あき勤、あきり、あきが、あき庶、あき吉、あきの、あき小、あき六、あき對、あきひ、あき額、あきと、あき死、あき
あき世、あきで、あきあ、あきら、あき見、あき通、あきり、あきえ、あきさ、あき死、あきの、あき事、あきね、あきも、あき親、あきの、あき忠、あき義、あきを、あき思、あき食、あきて、あき使、あきせ、あきら、あき有、あきか、あきた
あきか、あきん、あきと、あき小、あき六、あきを、あき感、あき涙、あきの、あき目、あきと、あきた、あきき、あき領、あきは、あきて、あき貪、あき賤、あき眞、あき愛、あき苦、あき人、あきと、あきる、あきも、あき物、あきは、あきひ、あきる、あき鄙
あきる、あき及、あき才、あき器、あきの、あき程、あきも、あきと、あき愛、あきた、あき死、あき孝、あき子、あきの、あき哀、あき傷、あき查、あきし、あき俺、あき羊、あき來、あきの、あき志、あき願、あきと、あき遂、あきて、あき寛、あき家、あき藤、あき白
あき安、あき同、あき們、あきを、あき恁、あき餘、あき波、あき多、あき敷、あき果、あきや、あきい、あきの、あき実、あき倉、あき四、あき郎、あきの、あき案、あき内、あきの、あき助、あき助、あき依、あきて、あき今、あきと、あきり、あき何、あき処
あきま、あきれ、あき俱、あきと、あき苦、あき樂、あきと、あき共、あきひ、あきと、あきと、あきあ、あきも、あき似、あきぞ、あき惴、あきす、あき自、あき殺、あきの、あき本、あき意、あきる、あき一、あき小、あき料、あきも、あき今、あき亦、あきあ、あき
あきその、あき子、あきと、あきる、あき人、あき一、あき善、あきの、あき進、あきむ、あきと、あき死、あき一、あき善、あきの、あき果、あき報、あきあ、あき又、あき一、あき惡、あきと、あき行、あきふ、あきと、あき死、あき一、あき惡、あきの、あき業、あき報
あきあ、あきの、あき譬、あき言、あき環、あきの、あき輪、あきが、あき如、あき一、あき惡、あきと、あき善、あきの、あき與、あきして、あき且、あき義、あきの、あき為、あき小、あき死、あきと、あき悔、あき多、あき目、あき四、あき郎、あきの、あき終
あき焉、あきあ、あきの、あき落、あき胤、あきの、あき孝、あき子、あき不、あき値、あき遇、あきと、あき後、あきあ、あきと、あき知、あきび、あき陰、あき德、あき陽、あき報、あき愆、あきと、あき造、あき化、あきの、あき精

巧一大奇事。神出鬼没。のまのまの。松平目四郎。今より。這庶吉の俺伴。當具。第も
 ちの以。做と。久後。まをも。看届。ん是を。末期の。心。の。成佛。せよ。と。宣諭。深死。情の。親子の
 終。日。四郎。血。不。流。る。左の。隻。を。推。抗。て。戦。れ。我。偏。狭。小。六。を。拜。む。嬉。し。心
 寛。て。忽。地。不。絶。え。と。一。氣。を。激。し。眼。を。睜。る。声。細。く。噫。有。か。一。期。の。洪。福。親
 衆。目。を。欺。く。與。死。し。と。采。ある。小。官。人。の。死。身。代。り。死。天。の。旅。子。の。又。二。世。の。忠。臣。と。做。も。登
 ら。ん。逆。旅。の。死。伴。那。世。這。世。と。身。を。と。う。て。憑。き。後。思。が。入。安。れ。も。の。内。安。ら
 ぬ。俺。死。さ。ぬ。美。事。の。腹。を。研。ら。ぬ。の。居。る。敵。を。殺。盡。せ。し。本。支。の。相。応。か。ぞ。と。く
 後。不。疑。す。の。あ。ん。と。の。心。を。朽。す。や。武。士。の。身。の。悍。く。も。刃。尖。才。不。二。寸。突。立。す。心。後
 れ。て。以。の。隨。引。続。き。の。も。の。を。半。生。死。の。容。佳。ぬ。俺。を。矢。傷。野。緒。中。の。劣。り。た
 正。長。物。が。天。や。明。を。是。と。右。の。巻。左。の。撰。て。キ。リ。と。腹。一。文。字。の。極。研。は。程。の
 熟。と。漬。る。鮮。血。と。共。大。腸。小。腸。頭。れ。ず。勿。地。変。る。面。の。色。も。今。を。浮。世。の。別。れ。の。一。呼。吸

そ。の。小。の。堪。ぬ。庶。吉。の。涙。心。れ。竹。の。よ。と。泣。く。ぬ。沈。む。哀。傷。き。と。小。六。が。引。接。南。無。阿。弥
 陀。佛。を。仏。と。唱。る。六。字。四。苦。八。苦。七。の。過。て。向。明。の。鐘。鐺。々。と。鳴。沸。る。彼。誰。時。と。生。滅。を。已
 寂。滅。為。樂。と。目。四。郎。の。刃。を。抜。て。吭。頭。を。搔。ん。と。う。両。三。番。突。外。し。う。な。う。ん。ん。吭。管。搔
 研。て。を。俯。す。け。の。登。時。小。六。の。身。を。起。し。て。を。庶。吉。良。別。の。堪。ぬ。數。死。の。這。天。明。さ。り
 目。四。郎。が。死。の。画。餅。と。形。を。身。も。亦。俱。不。捕。ま。路。次。の。備。の。刀。を。分。捕。と。快。立。の。記。念。の
 牌。の。合。斂。め。後。東。西。送。れ。と。將。女。の。庶。吉。を。な。く。涙。を。林。み。て。身。を。起。し。う。那。這。る。戸
 骸。の。頭。を。送。散。る。刀。を。一。口。合。抗。て。這。亡。骸。の。那。腹。黒。泥。鬼。右。衛。門。を。七。ひ。の。小。六。を。え
 か。り。て。原。来。其。奴。の。這。頭。の。在。り。て。御。高。目。四。郎。を。敷。き。れ。を。の。見。の。仇。と。知。ら。せ。七。敷。き。一。愉
 快。敷。き。れ。の。因。果。觀。面。徒。を。の。め。快。這。方。と。先。の。立。て。又。庭。門。より。先。の。立。て。不。結。陰
 正。雨。降。を。死。て。無。明。空。の。月。圓。の。の。ふ。せ。ま。う。と。う。な。れ。ば。這。縁。頼。の。片。隅。小。葉。と。笠。と。ヨ。マ
 く。あ。の。あ。を。安。同。の。若。當。黨。們。が。羽。立。氣。賀。か。の。の。准。備。す。し。是。究。竟。と。庶。吉。の。合。會。出

かく共侶の衰を被り笠を引提て主僕のそく出でゆく。小六も既に一丈あり。先小
 六も左右の樹蔭にひき入る。癖者等と喚びる。火の聲は光く白刃所んと
 せし笠投着て身と論せし小六が修煉。這那足を置れて鞭を透さ。抜敷の小
 一人の首を敷き落し。返り刀の又一人を起し。立寄りと斬る。窮所の深痰の苦と叫びて
 仆る。身邊に疾吉の走近。驚き。浮腫た。と公声より。や。小六を透し。アアア
 疾吉其奴が千々滅し。刺ね。這們的の外。外面送り。敵へ。あ。と。公。小六を透し。アアア
 不。公。滅の二。大刀。ゆく。往方。足柄越。京師の。公。と。共侶。潜。路。死。路。小
 六。入。山。雨。雨。有。も。袖。露。け。衰。虫。の。父。の。横。死。と。亡。母。の。胸。小。有。明。月。を。燭。を。落。て
 ゆく。主。俱。と。七。七。を。原。の。庭。前。老。小。六。を。柱。え。敷。き。一。個。の。安。同。が。奴。隷。長。老。を
 龍。卷。耳。朶。へ。喚。做。ま。の。又。一。個。の。既。介。と。喚。做。る。安。同。が。馬。の。鑣。奴。之。這。們。の。殊。小。酒。を
 嗜。目。で。醉。臥。と。は。醒。る。ま。で。死。人。不。等。し。酒。癖。あり。壁。に。那。劉。玄。石。が。一。千。日。の。醉。小。似。

其の故の身の務の。雨ふる。主の外。あり。一。由。數。番。なり。日。屬。を。俱。お
 禁。酒。し。と。之。慎。ま。た。り。けれ。も。主。の。安。同。が。湯。治。果。て。氣。賀。か。り。の。前。祝。今。宵。酒
 宴。あ。り。と。耳。朶。八。を。知。り。傳。折。も。俺。ひ。り。喫。去。生。甲。斐。る。似。や。夜。の。奉
 公。の。身。も。甲。夜。過。て。を。喫。べ。れ。と。母。思。と。酒。餚。と。盗。竊。と。准。備。と。整
 却。同。病。と。相。憐。む。既。介。と。の。身。の。子。舎。招。寄。せ。密。意。示。し。他。の。敵。も。軟。ら
 酬。れ。つ。ら。の。隨。小。醉。さ。れ。ば。そ。の。俱。不。睡。臥。て。主。安。同。が。敷。き。れ。と。知。る。の。曉。も。耳。朶
 八。の。内。逼。り。例。より。快。く。眠。覺。淨。も。せ。と。起。し。折。大。変。と。初。知。り。酷。く。驚。た
 か。そ。の。現。小。約。莫。這。浴。館。在。と。有。る。主。も。家。隸。も。皆。悉。敷。も。果。さ。れ。て。残。る。の。身。と
 既。介。の。仇。既。立。退。け。ん。中。小。癩。と。肩。へ。退。難。る。が。一。兩。名。百。亭。の。々。不。在。り。と。思
 ち。そ。の。言。は。れ。え。と。現。濟。一。竊。歩。と。故。の。外。か。り。ま。り。却。既。介。幾。番。と。ま。り。揺。覺。し
 此。信。々。と。件。の。異。變。と。報。知。す。小。既。介。も。亦。驚。呆。れ。て。い。ふ。せ。ず。と。相。譚。へ。耳。朶。八。重。

時沈吟と主後送るうらやま敷うらやまられお口ひ掩お們的の善よもるをを酔よ臥おとを知しらずとも聽きる
おのあらはしまるは逃にげる方かりと疑うまそ縛お頸のと如られ然らしまるは這この電去る商のぬ
身みと暗くし一い生せい涯げ世せい回かい陝せんくるぬは所しよ詮せん出し處じょ埋まい伏ふくと面亭ていの賊の退折せつ不ふ意い不
起おて討捕とと俺と和ま功名こう然ぜんと後難なんと面と起まると官府ふ沙さ汰たも
宜よしかん這この義奈な何なに其その之これ既い介けい所しよ一い談だん及おび至終しよ准じゆん備びと身装しやうしり刃やいばと引
提たて又那な這この規小せう庭ていの縁頼らいの兩戸こ外ぐわいれてありけれ原げん來らい賊そく這この里より入るるぬ
庭てい門もんと下と傾小せう長ちやうに傾て竊小せう庭ていと立て雨と樹蔭じゆいんに透れ今と等方かたを小
六むと知らず吉きち先せんとと庭てい門もんと入ると耳みみ八はちと既介けいと合と左右さうと右
敷しと找と計策けいの圖不ふ當たうれど技ぎ鈍どんと合期けい這この那俱き小せう六ろくと敷れて人ひとも知
られざるぬはけに任れば耳みみ八はちと既介けいが相謀そうひなける趣しゆ小せう六ろくと是と知らず況きやう安あん同どうが
黨たうは這時じ通つうて命と墮と後後ごとり一い小せう程けい経けいて耳八はちが女房ぶどうは良人らうの枉死じと

うち歎なげかて降か平へいの元絃げん小せう降か折せつ緯い佳けい々々と詳報ほうさるふの件けんのよと純は悟るぬあり
けとと毛をも耳みみ八はちとの室むろの仇を小六ろくと知らず敷しれぬ降か平へいの招めを
このぎよに降らせるは是この後話わと看官くわん宜よしと查せし一い小せう程けい不ふ底てい倉くらの邑長ちやうとは安あん同どうと氣
賀がの宿所しよへ立還たと一猛まう可か不ふ可かと昨宵せう夫ふ役やくを死れし石いし與よ屋やの主人しゆと俱に土
民たみ幾いく名な欵くわん馳ち催さいと小荷か駝たと牽せし竹たけ輿うと吊せし天てん明めい時じ候こう浴よく館くわんを庭門もん前まへ伺かへ
候こうし門戸この用と等うける日とや高たかく升るまと寂寞じやくとと音ねもせざれば大家きや
齊せい一い誅しゆりて咏えい志し門もん戸こを敲けも絶つて心のろりと疑う惑わくの胸安あんらぬ故こと邑
長ちやう石いし與よ屋やと連立れんて外面げんを那と這とち遠とほりと規き小せう庭てい門もんの戸を用てありし誅しゆり
さらし闖ちやう相さうす小樹じゆ下げひびぞ研られて仕さるぬ二人にんありあり何れと敷し馬ば謀ぼうで先夫ふ役やく
們ら報ほう知ちせ大家きや裡ら面めん小せう找たと入りと相あいひと斬と安同どうの主僕ぼく并なら不ふ數すうと盡して身み首くび登のぼ
異いふら鮮せん血けつの塗れ亡骸がいの間毎まい々々小せう思し系けい々々又また與よと面亭ていの間腹はら撞つりて俯うつみ



有像第十七

七



這本文見第十四回 四ノ目

たのちまは世のこころを
 底倉風脊著演
 編探虚實
 うたれよけりといふとまのころ

礼作

名ふた

智六

たるあり。相ふ御内の人をば仇多し。積まるの。後安同の臥房より隔亮の寫遣
きたる。數行の文字とて。昨宵藤白主従の姓名残る。撃れ。助則と。猛者
脇登。義隆の兒與。舊池。怨。雪。め。り。死。と。初。越。悟。の。然。而。在。る。を。あ。わ。し。れ。ば。
邑長の石見官屋の主人と。俱。安同。が。氣。智。の。宿。所。に。赴。て。猝。然。と。許。け。り。然。藤
白の從類へ。ひ。ひ。ける。凶。変。の。一。家。の。周。章。沸。如。く。老。黨。若。黨。一。騎。駈。り。底。倉。の
聚。來。て。亡。骸。と。檢。り。衆。議。と。疑。り。て。那。這。と。部。と。定。め。或。汗。馬。鞭。と。鳴。り。録。倉。の
赴。て。と。管。領。家。の。管。領。の。或。親。兵。を。從。へ。仇。の。餘。類。と。衆。の。あ。り。又。と。氣。智。へ。走
還。り。安同の妻長。総。底。倉。の。為。体。并。老。黨。們。が。衆。議。の。趣。と。具。に。注。進。せ。り。も
有。け。り。左。右。の。程。の。次。の。日。録。倉。管。領。の。執。事。上。杉。憲。定。入。道。の。沙。汰。と。て。二。浦
新。介。平。時。高。檢。察。使。と。奉。り。伴。當。り。從。て。底。倉。の。浴。館。に。來。着。あ。り。且。又。な。ら
亡。骸。と。甲。し。と。檢。果。て。安同の老。黨。并。邑。長。們。が。稟。せ。り。と。曲。々。の。向。糾。せ。り。安同主

從の敷まれる。その宵の。と。知る。の。ま。れ。衆。口。總。て。分。明。と。自。殺。せ。り。一。個。の。仇。と。是
則。送。累。せ。る。助。則。と。吸。做。の。り。義。隆。の。舊。臣。の。一。も。あ。れ。も。單。身。と。結。居
り。多。敵。と。敷。果。え。り。あ。ら。う。も。あ。ら。願。ふ。助。大。刀。の。支。黨。の。り。と。退。散。せ。り。我
其。頭。の。照。驗。の。り。と。緊。く。曾。向。れ。か。も。大。家。知。ぬ。の。れ。と。さ。ら。ら。あ。り。云。甲。斐
る。倘。這。一。個。の。仇。の。り。と。數。を。盡。く。敷。め。る。安同主従の。不。覺。言。語。同。断。今。戰。國
の。一。も。あ。ら。武。主。の。似。け。る。狗。死。の。り。と。一。さ。ら。主。僕。の。亡。骸。の。汝。達。宜。く。執。斂。て。後。の。御。沙。汰。を。等。し。な
又。助。則。の。賊。徒。を。當。所。の。梟。首。と。餘。兇。と。懲。ら。せ。り。と。嚴。の。宣。捉。て。却。時。高。の。録
倉。漏。府。の。馬。蹄。を。せ。り。と。小。程。安同の。横。死。の。屋。聲。隱。れ。と。藤。澤。の。夢。え。り。著
演。竊。不。是。と。訝。り。み。づ。る。巷。の。立。出。て。さ。り。と。う。ち。安同主僕。十。餘。名。の。夜。源
助。則。と。の。猛。者。の。劔。を。せ。り。と。為。体。の。結。々。那。助。則。の。義。隆。主。の。舊。臣。の。七。わ。り。と。年
齡。の。千。許。歳。桃。花。面。相。と。蒼。髯。の。箇。様。々。の。打。拵。美。事。の。腹。を。研。る。藤。白

殿の臥房より隔亮不送墨ありこれより復讐言の事情の知られし事ありて其の親て来
つる人より傳下実説を奇談を誇るの事ありけりその言大同小異あれも約ち里の戸
毎の額を集め耳を傾け譚ふよとちやて皆這噂の事いければ著演の疑惑にて
左の右の事あり世に同名の人見れども安同主僕と較ぶるの諱と小六がみづり撰
名無と同一の奇又その人の面貌と年齢と向考る目四郎より似たり非陰同
名とらふも小六も既古人の事あり又面貌と年齢と似たりと目四郎が小六の諱を知
はくもわづか知せし七假名の暗合をみるあれが目四郎も本事も二千餘名の大
敵と較ぶ果さるあふ憶ふ件の助則の實世の人の猜せし如く脇屋殿の舊臣あり
そと誰のわづかれ單身中七亡君の與ふ仇二千餘名を斬せし武勇忠誠今昔獨
歩の英雄は俺不幸な七傳人交るといふ事新田家臣と云われ空谷登音の
思ひあり加之安同の小六が與ふそ父の讐言俺身も亦怨と結びて害せんとの計較る

のりありと料も較ぶ果されし未見の死友俺身執ても義侠といふは俺亦その首
級と花井といふべきを要すをあれと尋思とらふ宵妻の晩縮の意衷の機密を
耳に示し七次の日の朝未明獨背門より出て見れば奴婢們の知る宿所ありと
も言ふけり却説野上著演の甚深く敷く底倉を投て赴く程日長ければ路次を
いそぎ既わく黄昏時侯より底倉の里来て鼻首級と尋るふけり其の第三目小
六の山里の申明亭の尚れありと云ふと其の跡を其れ赴く程日暮果て鳥夜光
ども其里の夜を成る土民が高張燈を點し建て火を焼くのみありければ其邊數間
四方の月の宵より明かりけり著演これ不便を以て鼻首級と執視る噫這首級の
今も疑ふべくもあらけり目四郎もさう驚かされて雖相々此も差錯るる
だけの倘成人の愁を俺も怪むと云ふと歩を駐筆其頭を過る如く走退死
は又鵠立て肚裏小の事那目四郎の事比小六が旅宿の伴とせんと俺も約せし

あれども小六が横死のそと果さそと朽をくまふとて命を棄て安同門を敷き果し々
 自殺とせん。這推量不差の他。一日の恩義を感て。竟る俺身も係る。死枉難く川拂
 ひよ。此の送果源助則と署せり。そとあるね。その助則は小六が諱。他がみけを
 撰り。俺も知れ死後及びて金と包。惜字紙の中より。初て見せしめ。目四
 郎の知る。汝知ぞ。小六が諱と署して。孝義と他譲らん。這も凡夫の了簡。及ひて
 かる大奇事ある。目四郎のその素生親の假名川の逆旅主人也。那身の頼の博徒之
 技あり。孰いとも。武藝勇悍。千方人持れり。のあつた。然るに。只その身。獨り。二餘
 名の大敵。劔をさす。奇中の奇。更とひつべ。凡慮の及ぶる。その縁る所。復推
 量る。小六の本意。この送果と。世草うせ。小六の亡魂。那目四郎。賞縁て。実父の與
 怨。雪め。且俺與の中。仇と倒て。未然の利害を。除けり。の汝。倘令。鬼祐。微く。目四
 郎。本事件。の。小六。其の。漏たれ。目四郎。知る。よ。も。助

則とい諱。那送果。署せり。ん。徳致合。され。初の。疑心。氷解。思ひ。半。過。ふ。お
 似。今。も。目四郎。當。初。安。同。密。支。を。漏。れ。る。の。れ。藤。白。の。若。黨。の。切。り。た
 る。も。あ。ら。け。ん。人。の。送。り。敷。れ。汝。今。至。て。助。則。の。目。四。郎。を。知。る。の。も。亦。一。奇。と
 い。ま。の。も。俺。も。初。の。這。義。と。悟。り。居。る。の。孤。忠。と。感。ず。隨。ふ。の。も。首。級。を。合。斂。め。葬
 り。そ。と。思。ひ。潜。ひ。て。這。里。お。ま。よ。り。の。系。疎。幽。之。既。目。四。郎。を。見。り。方。總
 面。前。ま。た。か。ら。の。死。を。還。り。明。日。那。首。級。を。合。却。と。棄。り。折。拾。ん。汝。更。團。で
 今。宵。宵。奪。ん。飲。つ。小。ま。と。胸。の。も。難。く。惆。然。と。言。も。去。り。存。在。の。け。程。不。忽。地
 後。方。の。樹。立。の。間。八。四。五。名。聚。合。來。て。密。談。の。声。を。け。れ。著。演。散。馬。且。誑。て。竊。歩
 考。其。邊。不。稍。近。着。て。竊。歩。他。們。の。地。方。の。社。客。を。ん。一。人。の。其。く。九。年。以。前
 の。地。方。の。藤。白。殿。お。賜。り。領。知。せ。れ。り。以。來。年。貢。の。故。例。不。倍。と。贖。債。ら。の。も
 る。村。の。課。役。の。間。を。時。々。宛。ら。れ。耕。作。の。便。着。と。喪。を。具。り。と。一。個。の。伏。家。が

いまだよきものなれ今番湯治遊興の民の難を成されぬ温泉の生活做まの。坐
ちて啖ひ五十日困窮至極考るの。旅客聚合をさうく誰とて泣けり。死に
又一個の伏家が患の俺里のまのあつ。山中の東の農戸は藤白殿の丸を剥され身の
膏腴を這年来採竭されも。主の横死の没怪の幸ひ世の鄙語。疫鬼
の七。仇を報ふといふも。是等の情由であらんか。といひ大家笑坪小入て。あれ成就ても梟
首せられ。助則と秋の猛者の。這一御の城隍。人新田の餘類。脇屋殿の丸を為
命と捨て大敵を劔ふ考る大義精忠世の人通て蒼ゆる。因て今も密談して。那亡
骸を葬るべしと俺も思ひ人のいへ。這頭へうちも聚合へし。梟首のけすまで三日。及ひ明日
首級をさる垂られん。その折竊の軀も。共小極もち。斂めて。里の寺院へ送るべし。といふを一
人が推禁めて。否。葬るべし。いれぬ。間近死寺遣。ま。那方さる。小艱着られて。苗害其
首小起るべし。といひ大家有理と。心て。考る。左せん。右せん。欽と。商量果し。さうし。うら

一個の伏家が沈吟と。這里。上。那里と。擇ん。藤澤。遊行寺。昇り。て。おいて。葬
ら。路の程。迫り。後々。ま。後。安け。且。那。首。中。福。良。長。者。と。吸。れ。ぬ。御。士。の。中。
義の。與。財。と。惜。ま。る。人の。難。義。と。救。せ。ぬ。廣。大。無。量。の。慈。悲。功。徳。の。風。声。這。里。
中。も。多。く。遊。行。寺。の。那。香。華。院。に。戦。死。の。體。一。萬。許。と。拾。集。め。て。葬。り。ぬ。ぬ。
それ。を。さ。る。施。主。絶。た。る。石。塔。中。月。々。小。櫓。と。向。水。と。沃。け。玉。蘭。盆。毎。小。の。與。布。
施。と。菩。提。と。吊。ひ。ぬ。その。慈。悲。言。く。枯。骨。小。及。び。て。合。除。る。を。免。基。碑。石。塔。も。歴。然
と。て。る。海。の。と。藤。澤。人。の。噂。小。夢。死。徒。れ。明日。那。助。則。の。首。級。と。竊。小。遊。行。寺。昇
り。て。おいて。葬。る。と。憑。心。ま。う。し。と。葬。り。ぬ。福。良。長。者。の。夢。知。り。て。後。々。ま。も。縁。亡。火
と。俱。小。香。華。寺。と。手。向。り。ぬ。這。議。の。甚。麼。と。其。々。大。家。听。く。感。心。考。る。その。説。宣。定。小
精。妙。之。余。ら。明日。桶。柩。小。首。級。と。軀。も。竊。小。斂。て。暮。る。と。等。て。拾。半。七。通。宵。走。り
ぬ。曉。が。ぬ。那。寺。の。門。前。小。到。る。伏。家。を。死。の。漏。易。く。這。一。野。計。を。支。足。り。て。其。の

伏家傳記 卷之二 十一

術與と錯ると送ふ謀一合せらる。余程の著演の料の件の密談と送るを多く
 果る。潜すの退る。更の心よりの善の與して悪と揮るの通ての人の心なる。那
 里人們が這地の主の死と歎びて親しく。目四郎と憐む。是使と氣の所行のしく。
 安同の年来の貧墨邪怪を知る不足れ。信れ今宵俺まで下きて首級と隠す
 及ぶ。那里人們が相謀ふ隨意俺香華院へ送りて。後の俺亦施主のりて。目
 四郎の菩提と吊る。世不知るを正あせし。後々までも安る候べし。叶ふと吐裏も分
 別を。決りけり。這時暮て程も。著演の底倉を。急要あれ。藤澤の近村へ
 色く旅客を。誘へ。轎夫と央て足と。取せ件の竹輿のり。乗りて。その通片
 走せられ。天と。明も藤澤の宿所近く。無着けり。登時著演の藤澤の里人
 処で。竹輿のり。立出て轎夫を還遣。宿所の背門に立在て人を喚び戸を
 開き。等得て奥へ赴ければ。折も還り。折も知るの絶てり。然る著演の

つま。あね。底倉の為体。及目四郎の支の趣。箇様々。其は。示せ。六。晚。稻。を。听。け。つ
 妻の。胸。と。淡。と。且。感。涙。の。進。む。を。覚。む。小。六。が。さ。の。ひ。出。て。庚。子。時。の。歎。不。堪。さ。り。と。這。時。ま
 ても。貪。睡。て。母。の。傍。臥。さ。り。奴。婢。介。も。目。と。覚。い。ん。件。の。縛。の。趣。の。末。の。さ。う。ち。ゆ。く
 いま。初。と。知。れ。身。と。起。り。母。に。對。して。根。据。り。垂。米。と。欲。り。同。く。著。演。の。隱。き。由
 る。軀。て。件。の。趣。と。其。は。示。し。口。と。林。か。めて。あ。ね。と。是。も。あ。の。よ。と。漏。し。事。を。と。戒。め。り。信。れ。が
 約。莫。江。湖。上。の。目。四。郎。が。義。死。せ。し。と。知。る。の。の。野。上。親。子。三。名。の。外。の。の。さ。あ。の。況。小。六。が
 陽。及。び。亡。父。の。怨。と。雪。あ。り。し。の。神。を。及。身。の。悟。る。不。由。く。歎。は。れ。越。小。弥。倍。さ。り。信。而。野
 上。著。演。の。不。以。ふ。り。あ。の。と。這。日。遊。初。寺。に。参。詣。表。け。り。大。檀。那。の。の。る。れ。住。持。の
 上人。と。依。方。丈。の。招。入。れ。て。多。く。對。面。表。の。程。の。看。茶。の。礼。既。不。訖。り。と。四。表。八。表。の。話
 次。著。演。の。住。持。不。對。して。信。稟。さ。り。何。と。や。ん。浮。れ。る。言。似。れ。れ。も。昨。宵。甘。木。灵。夢。を
 又。ら。辟。言。の。全。身。鮮。血。染。る。一。個。の。勇。士。忽。然。と。枕。方。不。立。て。告。る。中。俺。の。の。る。夜。横

死のめえ底倉人の帮助よりて明日遊行寺の送葬せらる。願ふに和殿施主よりて
 菩提を吊ひぬひか。と云々と云へば駭覚ぬ夢の五臓の疲労也。憑ひお足らぬ
 ねがひ。必ひくけぬ奇夢なれども措れを稟まの。這吉果して心驗あり。けし尚柩成
 當其蘭若を送り來ぬめれあは法慮不稱の。ありともその安葬せし允きせぬ異
 日小官火之餘も口説の外より與るともあは某総て身引受て左も右も討て
 這我を憑心稟え與ふ拜謁と請いまり。と云ふ住持は異議もなき。趣の
 るゆら滅済の出家の所役況劍難横死のぬを濟度ハ弥陀の本願入りけりとの
 あるわ。宜く葬りぬさ。と早業引ぬり。著演斜る。教びて。あは明日又
 参詣して夢の當本と知らず。欲を折見参まなれと告別去て退出けり。左右
 まる程その次の日。あは著演の準備の布施物と伴當の齋厨と又遊行寺の
 赴けり。登時住持の上人の。著演の對面とまの。施主の止られる。冥夢を果

あは心驗あり。今朝未明の底倉より。柩を早めて送り來ぬ。里人們一火あり。その仁兵
 義右衛門礼作智六信そ。喚做を五名寺門を敲て願ふ。夢を罪人の亡骸
 るれも稀る。義士でいへ。俺們竊に相謀て當院の未做ま。欲を。其れり。と云ひ
 けり。とて先役僧も。痺の仔細と問せ。件の尸骸の。夜女底倉。浴館を
 藤白隼人主従を名残多く敷果して。故主の怨と雪め。腸屋義隆の餘類也。
 當坐ふ自殺あり。官領家の。下知依て。自來首。日及び。よ。まで。詳ふ。と云ふ
 けり。當下愚僧も。九常変死の亡骸とも。容易執措。なかる。況や。是の管領
 家の。寵臣主僕。と。害を。梟首せ。れ。の。非除那首の里人們。が。心。義。我。を
 感。と。葬。ると。近。道。場。送。り。て。遙。々。と。俺。寺。葬。ら。ん。と。欲。を。故。と。あ。め。あ。ら
 ぬ。と。尚。這。世。の。官。府。沙。汰。及。び。る。の。禍。俺。寺。の。移。さ。ん。の。所。に。あ。ら
 ぬ。と。い。は。れ。ば。速。に。允。さ。ま。ら。ぬ。れ。も。昨。日。施。主。の。靈。夢。を。い。ひ。漏。れ。る。と。い。は。れ。ば。枉。て

柩を留借して那里人們を還したる。それをもて其の柩を乞ふに施主の詰來のよきもの。さうふていへ
 と澄るる報のふを著演つらうり。疑ひの介るるれをも身首の百の後るる。さう後
 難い底倉人們が里の隔で。柩を當院の寄るる上人の不二法徳と仰だまされる故る。さう
 某既の那義士の靈魂の瀕れる。果さるる。倒れ出泉と免々か。め好も。著演あらん
 限りの毫も。御寺の難を係する。さう。さう。請求る。さう。切る。さう。住
 持の上人黙止不由る。その意の任。さう。ひけの當下著演。さう。躬て納所の老僧と招ら
 よと告て。即便義士の葬式料七々の讀経料大衆へ布施の銀子まで目録の合して。渡
 与。けり。あれも。日のある程。さう。の憚る。あ。さう。の黄氏。さう。と。且葬式の準備あり。
 著演主僕。さう。の茶を薦め。夕饌と羞め。さう。と。姑且時と程を。さう。既。さう。黄氏。さう。り。
 六道人們の鐘と鳴り。と。衆徒。さう。本堂。さう。聚。さう。令。さう。沐浴。さう。小舎。さう。容。さう。措。さう。る。那義士。さう。れ
 柩を拾中。と。本堂。さう。る。弥陀の御前。さう。昇。さう。居。さう。け。亡者。さう。の。鼻。さう。首。の。密。さう。葬。さう。めて。想。さう。影。さう。も。亮

柩を施主當山の天檀那。著演が財を捨て。徳執の葬式を。讀経の大衆
 二十口住持の引導の偈句を唱へ。更法坐を占め。鉦と鳴り。木魚と敲く。追薦の
 法則丁寧。結果一折著演の道人們の指揮。去て。件の柩と小六が墓の傍。さう。深。さう。瘞
 め。瘞と締。さう。せる。さう。て。更。さう。闕。さう。て。宿。さう。所。さう。を。還。さう。る。さう。這。さう。日。の。伴。さう。の。立。さう。る。さう。字。さう。六。と。画。さう。七。さう。り。さう。る。さう。事。さう。情。さう。を
 知。さう。ぬ。さう。れ。さう。又。さう。是。さう。老。さう。爺。さう。が。事。さう。と。好。さう。ま。て。施。さう。主。さう。る。さう。死。さう。者。の。施。さう。主。さう。の。可。さう。惜。さう。鈔。さう。を。兼。さう。買。さう。を。成。さう。樂。さう。一
 け。さう。え。さう。ぬ。さう。ら。と。て。竊。さう。の。あ。さう。ぎ。さう。と。笑。さう。ひ。さう。り。是。さう。より。と。著。さう。演。さう。の。目。さう。四。さう。郎。さう。が。七。さう。々。の。忌。さう。日。毎。さう。寺。さう。の。詣。さう。で
 柩を向。さう。む。さう。と。い。さう。る。さう。と。卒。さう。矣。さう。忌。さう。子。其。さう。石。を。建。さう。て。義。さう。士。目。さう。郎。之。墓。さう。と。の。六。さう。大。さう。字。と。勒。さう。け。り。
 介。さう。程。さう。の。底。さう。倉。の。里。さう。人。仁。兵。さう。義。を。滿。さう。礼。作。智。さう。信。さう。之。們。の。身。さう。夜。さう。義。さう。士。の。柩。を。昇。さう。て。遊。さう。行。さう。寺。さう。の
 赴。さう。け。折。さう。住。持。の。早。さう。允。さう。の。め。で。回。さう。答。さう。數。さう。回。及。さう。び。と。さう。な。さう。く。さう。お。さう。し。課。さう。る。一。貫。さう。文。の。鏝。さう。錢。と。共。さう。お
 桶。さう。柩。の。役。さう。僧。の。遞。さう。與。と。躬。さう。て。逃。さう。る。さう。似。と。走。さう。り。底。さう。倉。さう。の。後。さう。の。ゆ。さう。び。さう。と。死。さう。要。さう。の。り。けれ
 と。心。さう。係。さう。る。さう。あ。さう。ら。ね。折。さう。々。噂。さう。と。さう。る。さう。夏。さう。の。過。さう。て。秋。さう。も。の。八。さう。九。さう。月。さう。の。ち。一。さう。時。候。仁。兵。さう。ま。さ

央まで鎌倉へ赴ける。かき遊行寺の立寄て那義士の墓并られん墳墓とも視る。と以
 いて墓所に至りて那這と云ふ石塔を相見せし館某之墓と勅したる墓の傍は尚新
 しく麻石立たる墓碑ありて義士目郎之墓と勅し是れは是れと精し七を不よく相つたる左
 志せし歲月は元永十八年四月廿四日とありしが是れを是れあり。智六が逆の了は簡差の
 那福良長者乃松の稍知りて施し石碑を建せしをいけり。と云ふははる當面小寺
 僧の回入のさかき。ち底倉かへる。然る義右衛門作智六信三は四名の之は
 恣と件のよしを報知されし大家本意あると不覚て現仁兵の精せし。その新墓を福
 良長者の建せしを疑ひ。然る墓表の助則と鑄着られぬ世の憚りて竊に斟酌
 せられし。ふふと又目郎は是甚る意を。猛者の眼の細く。皆圓る。ははれは
 大目子との義我もあんと竊にこれを評けし。素より。這里人們共々貧賤のはる。い
 何陰徳われぬ。一家見病病人稀老。各々見子身くわら左も右も。あて世を渡る。飽と云け

ほど饑き凍せ俱不上壽と保ちし。と云ふも是後の話。這五俠民の。是より下は話語る。

第十四回

足柄踰小長 総奸夫と伴ふ
 吉野山小六 女仙小遇ふ

話表檢校使浦介時高の次の日鎌倉へ歸着。執事憲定入道は底倉を為体
 并小安同の老黨邑長們を質問の趣且賊徒助則と鼻首の事をも箇様々
 具に演述せたりける。因て憲定入道は件の緯の趣を管領家氏へ告げ。更ふ又
 散せて。佐と慎み処べし。と下行状を遣し。入後鎌倉の營中。執事評定衆
 聚會。藤白隼人安同の横死の是非を詮議あり。登時上杉右衛門佐氏憲が先
 けの。安同が那宵の不覚。今ゆく論議及び。彼の身主從二千餘名一個の
 敵小殿も果されし。婦幼も異なり。尚亦敵助大刃ありて。多退去りたり。と云ふ

殿留留りし亦是不覚とらるべし。左も右も武士たるもの風上も置くべからず。這
 美と以てその罪を定むる事あると憚る氣色もあらず。論せし執事憲定の嫡
 子たるけ。安房守憲其も共侶の膝を找めて憐の事を安房守の年来私慾
 冥りの陽の檢素と支とあらんと陰の驕奢と旨とを貪れ飽とてをさぐ
 民を虐げ。奸曲死後の發覺れてこれをその勘と然るをあれの比他湯治の
 暇と賜り久く底倉の逗留の程遊女と携酒宴の耽り。盃盤仗家の金銀とて
 造りたりしもヨマくあり。その臥房の錦繡と列ね庖厨の玉と炫冠柱と新ふさ
 今番三浦介が目撃をみて既その支えあり。傍に賊罪ありのれば縦横死の不覚の
 るくとも何でか免る方あるや。を米色を召放りてを妻子家僕們を退散せし
 られん。法曹至要の明文あり。何等の疑ひか。と言爽の談たりけれ。評定故老の甲
 しも敢て異議不及ぼ下官們も豫より思ひざるふあねども那安同の御先代より出

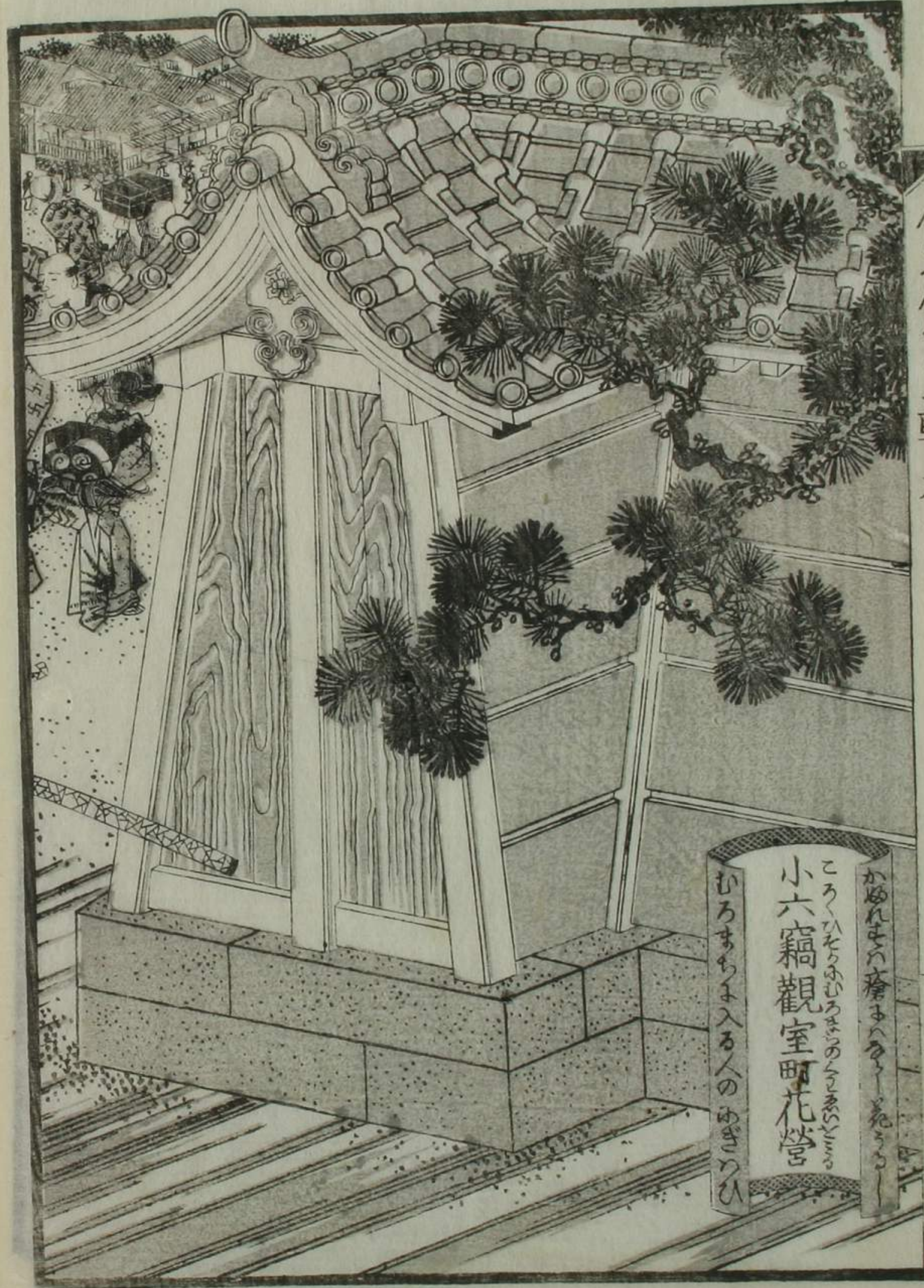
とうきの頭とうきのの寵臣このなれ。上の賢慮このの憚り。愍みその罪を定めしむは然る。佐殿房州の宜
 趣公論このを誰か感服せし。俺們とて。その餘は御同意のしめられ。異口同音
 応へ。執事憲定入道ら。衆議の一決律文の旨を稱ふ。珍重る。他も重用
 未のい上の死このの辟夏のま。愚老も亦安同と通御用立の。いひける便毎
 利口このの惑され。行心る。現盗臣の箇の利の。這聚斂の臣の如く。民を虐げ。毒流
 未その害億兆及ぶ。他の横死の公私の幸ひ。あつと快け。諾ひけり。恣而憲
 定入道の評定衆と共侶の件の衆議の趣と管領家。おぼえて。安同が罪過の。の
 恣とて。宣せし。持氏。直と示れて。俺のやく。あがりける。他が奸曲言語同断又
 その横死の為体。宜ふ沙汰の限り。然らば汝達の定め。如く。當ふ罪の行へ。自
 餘のふの恣と。嚴命せし。憲定これを奉りて。即便三浦介時高と。又氣賀へ遣
 去て。安同が米色は。年来貪貯る。金銀家仗と籍て。皆悉没官せし。妻子

并小從類の送るく本地と逐れけり。然るに安同が老黨若黨雜色奴隸に至るまで。那宵
 底倉あはれなく。死に免れず。教びに又堂と反まごどく。禄と喪ひ家を逐れて。私財雜具を
 會出せども。近頭の里人も。柱客も。比目憎むの。些も憐むの。まければ。そを預け措く家いあ
 ら。見く途おち垂ホて。只蟾の子と散ま如く。縁の由縁と求め。皆八方へ離散して。往
 方も知むるふけり。その中。小女同の妻長総。原是相模と申。非の封疆る。丹澤の庄官
 某甲の女兒へ十稔許前。比二親の身まると。家督の兄も世と早う去て。今。任のせられぬ
 舊里を。その家の。底小寓。さるる。長総の素より。密夫あり。その藤白の家の若黨
 少。稔。小夜二郎と喚。做まの。長総は。這年来。その良人。安同の。壁。妾も。居。ま。あ。り。荒
 淫強酒を。ける。喫。酔。く。い。へ。と。林。む。む。花。柳。を。墮。れ。墮。れ。邪。念。起。り。と。卒。然。と。い。俺。も。亦。道。守
 了て。阿。容。々。々。と。生。涯。巢。成。せ。れ。ん。と。の。要。を。あ。れ。と。尋。思。と。し。此。彼。と。竊。小。擇。む。近
 習の侍者。小夜二郎。初。安同の。龍。陽。を。り。小。女。介。小。龍。と。奪。れ。賸。年。も。長。れ。額

髪を刺除きて。近習の列おゆる。な。然。れ。そ。の。人。と。り。男。子。態。美。く。且。管。絃。の。技。も。と
 も。大。抵。の。習。得。婦。女。子。の。孝。順。を。け。れ。長。総。此。と。密。通。し。早。晚。樂。を。取。り。と。ま。り。
 倦。れ。女。同。の。敷。れ。折。も。夫。婦。の。情。義。敦。く。悲。泣。の。涙。外。視。の。内。心。あ。り。小。夜。二
 郎。と。男。妾。小。夜。ま。く。あ。り。と。忌。憚。り。と。ま。り。ける。樂。の。ま。央。る。と。猛。可。不。離。別。の。哀。を。あ。り。
 當。下。長。総。も。さ。り。丹。澤。の。俺。親。里。を。れ。も。既。に。お。世。と。思。ふ。と。任。の。家。督。小。夜。の。叔
 母。を。れ。と。く。寓。居。の。時。刑。餘。の。人。と。と。駭。れ。れ。て。東。態。の。准。心。か。を。り。進。退。其。首。を。谷。と。
 後。の。悔。し。た。と。あ。り。所。詮。他。郷。へ。赴。く。と。幸。ふ。と。俺。貯。禄。の。回。銀。の。言。ふ。は。俺。愛。郎。と
 共。侶。の。浮。世。と。渡。ら。樂。し。か。り。然。し。と。く。軀。て。小。夜。二。郎。と。縛。係。々。と。密。出。談。し。可。不
 逆。旅。の。准。備。と。整。面。之。個。の。老。黨。の。小。夜。二。郎。と。お。て。親。里。赴。く。と。い。ひ。あ。り。ま。り。ゆ。ふ。
 勢。ひ。不。附。に。采。利。と。料。り。主。従。を。れ。今。一。這。折。の。主。の。安。危。と。ま。り。其。身。々。の。損。益。あ
 執。も。逆。上。て。さ。り。と。從。約。ん。と。い。ひ。の。言。を。長。総。の。倒。れ。没。怪。の。事。と。聖。言。も。外。口。を。俺。愛。郎。年。れ

十あまの三も四も弟をける。小夜二郎と久後と。夫婦はるるんとあそぶる人より先ふ
 出ても。今と初の旅衣俺天る。ぬ袷笠と投て。往方の定めゆる京師のこころ當の
 よ宿のふはく杖も。さるる足柄の足信と。地りける。話分両頭。介程の館小六助
 則いのる。日の曉と。楯取庶吉と。後て足柄山より登り。都路遠く。赴く程。人迹絶
 なる山路也。血染るる衣裳。谷河を洗淨め。身甲と。鎧臙盾と。庶吉が被る。禪
 衣の皆その流水に推沈めて。跡の埋め形と。窶。却と。行隨の雨。食。風。梳。旅宿の
 憂苦。どののとも思ひ。憂の所。養父のうへ。禍をれと。念まる。約莫一句許。不。平安
 京の来は。け。二條大橋の頭。歌。店。宿。を。投。めて。夏果るまで。這里。も。裏。南。北。西
 朝廷の。宛。和睦。を。せ。し。り。京師の。方。僅。も。長。雨。也。前。將。軍。義。満。公。の。心。永。十。六。年。小
 薨。り。の。ひ。て。三。輪。小。寺。の。今。の。足。利。四。將。軍。義。持。の。治。世。也。賞。罰。正。し。か。ぬ。故。老。の
 家。臣。三。三。補。佐。と。先。代。の。武。威。餘。り。あ。れ。ば。叛。く。の。立。地。伏。誅。と。風。波。起。る。西。民。廢

まゝ家業と。奥へ。と。る。の。り。ま。でも。太平の。國。安。れ。と。祈。り。ける。然。る。小。六。を。世。と。潛。ぶ。身。の。這
 里も。外。視。の。厭。し。けれ。額。髪。と。剃。り。成人。の。り。と。名。と。隱。し。氏。を。更。め。館。小。易。る。小。連。を。と
 ち。連。小。六。と。唱。さ。る。又。助。則。と。の。名。と。告。ぐ。ま。ある。時。の。亦。関。と。も。唱。へ。て。出生。の。地。と。表。し
 たり。是。よ。り。その。名。漸。々。江。湖。上。高。く。歩。え。世。の。游。俠。を。數。る。もの。小。六。と。以。巨。擘。と。一。たり
 ち。是。後。の。夏。の。と。世。の。人。の。も。知。り。ける。間。話。休。題。却。説。小。六。を。逗留。の。程。日。毎。々。々。の
 庶。吉。と。初。て。洛。中。洛。外。這。那。と。り。名。所。故。迹。と。歴。見。と。地理。考。へ。人。氣。測。る。當。憤。り
 胸。小。満。て。野。花。山。月。も。樂。か。ら。嵯。峨。の。太。上。天。皇。南。朝。の。後。東。宮。也。渡。り。せ。め。い。小
 倉。宮。も。恙。る。く。御。座。ま。よ。い。少。え。か。も。東。路。あ。る。ぬ。京。師。の。中。の。関。三。伏。の。夏。過。て。京。の。北。の。白。河。の。秋。風。の
 ひ。立。く。訪。を。も。た。ん。た。ん。と。左。右。の。程。の。も。三。伏。の。夏。過。て。京。の。北。の。白。河。の。秋。風。の
 たり。時。候。あ。る。け。り。登。時。小。六。を。以。て。由。る。京。師。の。旅。宿。と。累。ひ。て。只。足。利。家。の。富。貴。を
 規。つ。送。恨。の。留。月。と。焦。せ。る。鳴。呼。俺。ま。る。鄰。の。宝。を。數。ふ。似。て。益。ま。る。れ。今。より。大。和。小。赴



かぬれまの瘡まへきりて花さる
ころいへりみひろまのころまきり
小六竊觀室町花營
むろまちま入る人のゆきりひ



十九

母羊玉堂印發

有像第大

ちんま

小六

吉野山より先帝の山陵と拜せしなり。那首の舊跡古戦場と吊ふげれと尋思を
 遂に京師と立去りて又大和路の遊歴去後醍醐天皇の宮陵の吉野の山の南かき如
 意輪寺の御堂の背の御座をけり。と豫言せよと云ふ。岷々る高峯は襟登る唐
 吉も亦年来逆旅の熟る甲斐ありて。後限に俱に杖て那宮陵の詣り。是秋と
 相なれ。主僕且懐舊の涙いと吐き。人間栄枯得失の理を譬言れ。杪白ひ春の
 花峰の彩る秋の楓。孰もその根の飯らるる。現世の世の夢もれ。貴に賤に推並て盛
 るる。君必哀世の這生を哀た。の誰う這死を免る。然も十善の君とて天日嗣知
 召を御位の最も正可の三種の神器を傳へて。六合曲もく治さる。愛は天日御
 威徳のも任る。枉津日あり。尊氏て賊臣の是余逆。江湖上復安。て舊都のあ
 住ひ克のせぬ。這行宮の年園て。竟の山崩御ひける。その死迹を吊なれ。青塚苔滑の
 去て石泉織々と流れ。白楊早謝て。落葉離々と乱れ。元四年八月六日と改元

這君崩の比一上連部一云侍の這陵を今も忘れ果せり。あはれいせよと
 是月と詠たり。もあはれ今も一日の如し。悲死をといふ。昔を偲む。小六を宝
 前小吟居て合掌黙禱時移る。意衷の祈願を訴す。心願の野合會の
 声峰の松風音添て。凄愴を弥増ける。是より又後村上天皇の宮陵と拜せし。後龜
 山天皇の行宮の趾のゆえ。諸司百官の宅地見る。成就に誇る。成就で只腸の媒と
 る。このをヨる。け。却山中の神社佛閣鳥路能。徑の幽る。其の推乃。出はひて
 送る。巡礼果ある。更ふ。又林麓下。て或の笠木の山。登り。或の南將の古城とヨ
 ねて。約の大和十五郡を隈る。歴覽せ。程の秋の盡て。冬も。土月中。浣衣のけり。
 登時小六と又あや。俺身幸る。生る。日の邊り。けれ。南朝の奉為。一臂の力を
 盡きて。切り。い。切て。一年。三。月。先帝の御廟を。衛り。勤仕の。微忠を。表は。下。年。の
 ころ。ふ。わ。り。た。る。何。処。の。春。を。迎。ん。や。と。て。遂。に。吉。野。の。山。籠。り。て。敢。又。林。麓。下。ら。る。藏。王

堂寺の坊舎を空寮と僦賃て姑且其里と宿とあり。後醍醐并後村上の宮
 陵を参詣して御垣を拂ひ香草を献る。度吉のよくれ仕へて割筈を馳ひ谷水を
 汲ると雪の朝雨の夕も主僕の忠誠辛苦を厭せ那の詣遠を参て最上首の勤行を
 程の今茲の暮春て応永の十の九の春二月の時候よりけり。修り程の有一日
 度吉の些の恙ありければ小六の快立出る。例の如く後醍醐の宮陵を参仕る。且山塵
 埃を掃拂ひ然而水と汲み櫛を献り姑且祈念する程の忽然と一々南の岑の琴の
 調の修えける怪し那方山又山の人の住む所なる故何ありんと思ひ。念の果て
 退く折心ももろろなれ。藤園を一個の了鬘の何の程のう後より。亮女小六の對ひて
 乃松の脇屋右少将の郎君のてとるまれば。俺神仙嬢のわて来よと宣ひて。皆て那首小
 在まて卒這方へ先を立て去向も告を伴ひけり。小六のゆく誦りて。あを狐狸などの所為る
 志とあきのう推辞小由なり。引る隨小恍忽とて。跡小跟り。略の程の幾十町を身を

記えむ。もと既小過りて。こられ品石の累り立て五十尋あり。あるへくんと。あなるなる
 頂上小嬋娟な一個の女仙。琴と膝より乗して。端然として。跣坐する。身長も餘る
 黒髪は肩より横て白母なる。桃花の唇。臥琴の眉。玉よりも清白。肌膚衣徹る。綾羅の
 袂の翻籠として。天津彦即の舞樂降り。花も似る。金做走那身の光明。赫赤大
 とて。蟾蜍。灵兔の殿裏。小遊月と思ひ。五彩の瑞雲。腰と遠りて。身の中。天小在。如く
 三十三相。具足して。神仙ると知る。不足れり。こもりなく。其が頭小近。着死。認る。甚。歴
 まる。と。必。程。小。白。雲。油。然。と。足。下。不。起。り。て。凝。り。階。梯。小。り。小。六。も。其。月。了。鬘。不
 誘引れ。梯を踏。階。踏。る。此。も。危。死。と。あ。と。女。仙。の。身。邊。小。赴。る。登。時。件。の。了。鬘。ハ。跪
 気色。と。同。ハ。女。仙。の。を。琴。撥。遣。り。て。眼。と。開。小。六。對。ひ。て。善。哉。勇。士。近。く。找。ま。阿
 郎。ハ。忠。孝。世。小。提。れて。文。武。兼。備。の。才。長。ま。薄。命。不。七。志。の。も。伸。る。所。然。が

鹿獨る戰馬の回生出く親別君を喪ひ遂にその身も異姓不寓せて稍人と成るるを憐れ其頭の厄釋て男子四方の志を果さんとあつる及びて先當山る先帝の宮陵に仕まつれる丹精賞去下といへども後醍醐天皇の大御靈の這所はまさき今より七十有二年前秋天皇崩御の比賊徒退治の御執着少く御靈を亡失させぬ節死したる文武の諸臣の冤魂を召聚て這里の舊都へ程遠なれ御本意を遂させぬ便をいへせんよと睿慮を旋りぬお龜山の仙洞小行幸と做しぬんとて宝輦御して出させぬの百官前後に従ひまろし人の樂を羨しく那里遷御做しまろしと當時侍從忠房と京師の夢想法師の夢を正可なりととあけの忠房これを筆記して送忘備せられぬ秘して人あてを告りければ今這毛と知るもの稀に徳に先帝の大御靈の這御吉野の山在る然る香華をまつせて仕まつる益を祈り余の毛を阿郎不知せんとて竊に招れさせぬと玉音如生らす

小六も奇異の思ひを做して額に死さける頭と拾け仰りけりひ然る今より何処と投て立出さようらんや又南北兩帝の御誓言約まき如く小倉宮の當今の東宮に立ぬひも御世を知召れば汝の毛も示しぬひかとい問を女仙らち阿郎の這里も要る死す今知りて速におも去まきと又料を障りて来て清明の時候お及ぶ偶這地の春を迎へて開く花を等々邁ん送憾なきを急ぎて自然に健せよか却時と浴て下山及ぶ神風の伊勢お遊び那首の南將殘燼の北田氏國司も勢お附死せぬ道ひも憑死るあづとも思ひけり故人おあんと小倉宮のあんと這に御世知召ま死御前約ありといへども義満義持胸狭く只南朝の自皇胤と絶まわらせんとおのきも皇國の治乱は遠慮せむ驕慢不信の音とて執政の言をこれいふともおとが天のまき定りて人天の勝つ折れ阿郎の純孝孤忠も侍事おるふ似たり後の惑いと解免與の輪回の理の示さん歎抑後醍醐天皇のあん過

世考へば則是天武天皇の後身也と云り又北朝の光明帝は當時天武
天皇と御位を争ひて亡されぬ大友天皇の後身也過世の御果報盡きりけり且取初
後醍醐天皇は北條高時入道が御位小即ち也持明院殿と推退けて建武
回復すこれ程も尊氏暴虐より世間乱れ尊氏又光嚴の弟光明
帝を執立まつて武威を華夏振ひて遂に後醍醐天皇は吉野に潜幸す
南北朝と云れぬ是より以降五十餘年諸國小蝸角の戦ひ絶え南朝は御二世成
累のて三種の神器を傳へて文官武臣忠義の每家を忘れ命を擲ち後竟一統の
御世を御す欲せしかども時運至るを画餅と云り今北朝御一統の大御世と云
ゆる前世は天武天皇の吉野の宮より潜出で大友を討滅し輪回するて今生
る後醍醐天皇と生れぬ那大友の後身也光明帝の死は小呂竹の世に陝ぬ
る吉野の宮にたつ露の帯有ぬ怨と慰難て竟に崩御し在昔天武と大友の御位

争ひの原是天智天皇の虚讓名聞と好ませぬ以て皇子大友のありけり。そと自王太子の
立ちぬて自王太子天武とて東宮の御すをせぬ。そと那虚讓名聞を御本意と
あらせり。天武のそと猜ひぬて悄悄地に嫌忌の禍を避ぬん為大友の位を譲り祝
髪して吉野の山に世と不樂ぬ。も御本意のあらぬ御隱謀をとりし大友
はあろ安ろ左大臣蘇我赤兄右大臣中臣金們と相計て亡むまわると欲志王
へるその克既の急なれば天武は吉野を潜ひ出て近江路也。大友と天下併一の戦ひあり。
大友竟に戦敗れて陣中亡ぬ。金に斬られ赤兄に諱され残黨咸伏誅して天武
御位小即ち也。天和州淨見原の宮造りて世と御知王十五年這朝より白鳳朱
鳥の年號を建立させぬ。姓を八種小定めぬ。中宗と稱せられ。聰明睿
智の聖王と云れぬ。只御一代の崩御の後天武の皇后讚良皇女女帝と御す。
天下と知食也。則是天智の皇女大友の女弟持統天皇也。天武の本

義詮和訓
本平記の
りとは又
説小治政
主義義義
明の子孫
あれは同訓
うたはし
説の義
実のヨリ
あり

意と遂めども御一代也又大友の女弟多持統天皇御位即ちひくは足その
本末ある不似たり。啓言に北朝の光明帝の尊氏立られて御本意と遂めひくは觀
応二年の足利義詮が南朝の後村上天皇を迎まつて姑且降参する時北朝の光
嚴光明宗光の三帝の吉野の合はれぬひくは義詮又宗光帝の御同母弟北朝の
君不倣いまわせば後光嚴帝即是之徳而義満の時より後々の持明院殿の御嫡
流宗光院の御子孫の正統あるをせぬるん然に當初後醍醐天皇と御位と争ひ
ぬひくは光明帝の只御一代なり。在昔天武天皇の御一代なりが如く又尊氏直義の
前身の在昔大友天皇の御代も天武天皇とひくはせんと謀るる金赤兄であられけ
今生も大友の御後身光明帝は仕々素懐と遂るるの宅南北兩朝の名あは
文官武将の前世の或は大友は仕或は天武を幫助するり百官の宿業より今生
中も又敵躬方とるける欲是も亦知るべし然に天武も大友も又南朝も北朝を順逆

その差あるのり。皆是天照自天大神の御子孫なり。まをその得失の皇祖の神れ
神慮の傍る所を孰を是と孰を非とせん畢竟は這風雲の會小乗と栄利を
謀り。獍鴉被害の大悪物の虎威を借り時運を以て世を擾乱したるを皇祖の神
も今速に禳鎮めぬるの克己の徳とけりせん言はれ天小勝の時運と天可成
知るの天をも恨まむ人をも外れ世の忠信の狗とるるも乱離の人小なると念
て英氣を養ふ。輪回佛の説く所賢とく不肖とく。料づける横難小遇ると
過世の業との忠臣孝子の不幸ある義士貞女の壽命も皆是過世の業報と
といふは。雙言不報不恩との心起らん然とて支の不祥小遇不毎。這も輪回なり
那も亦業報と生悟りある。君父の為の中怨と雪めその身の仇を思ふ。形の武
士不似たりとも。その行ひの出家小同。徳の五常と蔑如して蒙々たる未視。難狗
兎小異なり。抑亦悲かざる然るを今愁小輪回の説小馮心るの。後醍醐天皇と



神仙娘



君を...
被了鬚掖小六渡雲梯
よけを...

小六

仙遊里女

有像第十九

光明帝と各々その御子孫の正統を以て兼めり。理りと示さる。又那道義法師
 欲の如く南北朝と立つて。麻のどふ乱れる。六十餘州を討ち治め。大功あり。似れども
 驕恣にして。君臣の礼義を思はず。不信不実の性なれば。善政罕く。虐令多し。故
 六十餘歳まで有つて。命數なり。帝星その算を奪ふ。五十一也。理り。是則天
 誅なり。應報ると。是は是の意。味へ。姑麻姫の對面の折を。然而詳し。知り。う
 あらん。いふ。は。是。ま。之。快。宿。所。の。退。り。が。と。促。り。又。諄。返。す。宏。論。奇。辨。耳。と。澄。せ。し。
 小六も只願感服して。示教の趣肝胆銘と。兼知つ。ま。り。ぬ。介。る。也。も。人。欽。神。欣。
 君の素生の知ま。又。姑麻姫と宣せ。何人。も。猜。か。ら。り。這。毛。も。示。さ。せ。玉。
 ひ。と。同。ふ。と。女。仙。の。姿。あ。ま。ま。不。言。と。俺。身。の。這。山。中。も。又。河。内。の。高。峰。ゆ。も。遊。び。年。と。
 歴。る。の。も。素。生。の。名。も。る。氏。も。る。又。姑麻姫の。り。も。阿。郎。と。宿。縁。あ。り。の。る。を。
 今。具。小。告。も。も。これ。も。亦。退。り。と。必。合。さ。る。よ。あ。らん。天。機。と。漏。ま。り。要。る。と。と。論。

あ。く。軀。側。る。珠。瑠。璃。の。壺。の。蓋。極。遣。り。才。小。三。粒。の。仙。丹。と。合。出。一。紙。の。拈。り。て。
 小六も贈りて。勇士も。這。里。へ。招。け。り。か。も。毫。毫。も。も。歎。待。あ。り。と。これ。を。ま。わ。り。
 ま。一。粒。の。の。の。の。服。し。て。效。と。試。す。又。残。る。二。粒。の。後。々。の。必。用。の。所。あ。らん。努。等。閑。
 みる。あ。の。ひ。と。と。諭。ま。小六も受載せ。ち。一。粒。と。吃。下。せ。香。氣。忽。地。頓。郁。と。口。中。の。
 充。脾。胃。の。走。り。快。然。と。清。々。と。氣。力。日。属。十。倍。と。思。慮。と。増。し。智。慧。と。
 富。一。是。より。一。日。と。経。る。ま。で。食。ざ。れ。も。饑。さ。り。け。り。憊。而。小六も神。女。仙。の。飲。び。を。
 舒。別。れ。を。報。け。又。了。髪。衣。送。ら。れ。復。那。雲。の。階。梯。と。渡。り。て。か。つ。り。程。の。了。髪。衣。を。
 後。方。より。忽。地。の。声。と。け。り。後。や。刀。袂。東。の。山。峽。と。亦。肉。せ。る。初。樓。の。用。ゆ。り。と。
 小六も遠く。又。あ。ん。と。せ。程。一。も。あ。り。愕。然。と。と。歩。と。失。の。雲。の。階。梯。中。絶。と。
 身。を。倒。小。子。尋。の。谷。へ。墮。り。あ。ん。と。思。ひ。一。是。假。寐。の。夢。の。一。と。る。先。帝。の。宮。陵。と。拜。ま。す。
 了。を。伏。額。つ。死。臥。て。在。り。け。り。駭。覺。り。身。を。起。情。然。と。心。を。定。め。て。那。這。と。又。入。佛。の。

眼まきとさきを遮おさるものもろおめり。夢ゆめ然ごとと必かならず口中くちゅうの茶ちやの香か氣きを不ふ耗こうせど。残のこる二ふた粒つぶも懐なつかふ在ある。原もと來きた那な

 仙せん嬢じやうの幻まぼろしのま過と去こ未こ來らと説と示しいひ入いり。噫あゝ有ありる。慚なげ愧かいと獨ひとり語ご身みを轉ころして

 其その方かたの高たか峰ほうと數かず回かい伏ふ拜はいと默もく禱たうと。歌うた舍やふいそ。春はるの日ひの山やま静しずふと。那あの這こと霞かすみ空そら

 引ひ時とき候こうまがら。途みち果は敢あとと。黄ま昏ごんの宿しゆく所ところの辿たどり着つけ。相あれは。庶しよ吉きちの病びやう苦く嘔う吐へ。衣きぬ

 うち被かひぬく。臥ふしりと。あらまら甚い麼ふと。驚おどろれて。喚よび覚さまる。容よう子まと。向むかへば。今いま朝あさのさままであら

 ざりしふ。午ひるより寒さむ熱あつ往い來きと。口くちさら乾かわれて。堪たむらとのひけり。よととと小こ六ろくを柴しば折お焼やく。白しろ粥じやくを

 煮ゆ沸わくまと。准のり備びの前まへ茶ちやのろろ共とも小こ薦せんめて。親おや切きの勲いされも然さとと此この效きもま。次つぎの

 日ひの人ひとを央なかつて。山やま脚あしの里さとより。殿との師しと迎むかへ。茶ちやを徵め術じゆつと。晝ひる景けい看かん病びやう息いきるまめめ。病びやう

 着つけると。劇げきうなりて。あの夕ゆふより。衰おとろ果はる。庶しよ吉きちのあのあ曉あけのあ忽たち然ねんとと呼よ吸そ絶えるこ。小こ六ろくを憾うらみ

 のあのあけん亭てい年ねん纒かんふふ十六じゅうろく歳さい命めい數ず越こふこ。盡つくまるま。飲のむま。又また。這こ次じのま。卷まのあ。鮮あ分わるま。と。聽きねか。

閑卷敬馬奇俠客傳第二集卷之二終

27

